

令和元年度作品集

平和 コンクール



第19回平和絵画コンクール最優秀賞 釧路市立湖畔小学校3年 阿部 晃大 さん

釧路市平和都市推進委員会

目 次

第19回平和絵画コンクール

最優秀賞	湖畔小学校3年	阿 部 晃 大	1
優 秀 賞	清明小学校5年	小田嶋 柚 夏	
優 秀 賞	釧路小学校2年	小 林 夕 純	2
優 秀 賞	愛国小学校1年	八 田 胡々音	
優 秀 賞	鳥取小学校3年	岩 田 知 怜	3
佳 作	釧路小学校2年	松 田 萌 那	
佳 作	清明小学校4年	澁 谷 茉 奈	4
佳 作	清明小学校3年	池 端 和々子	
佳 作	愛国小学校6年	八 田 凌 弥	5
佳 作	愛国小学校3年	笠 島 悠 愛	
佳 作	愛国小学校1年	細 野 陽菜子	6
佳 作	鳥取西小学校4年	小 林 真奈美	

第32回平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞	附属釧路中学校3年	五 堂 叶 惟	明日も	7
優 秀 賞	附属釧路中学校3年	佐 藤 夕 愛	本当の「平和」とは	9
優 秀 賞	景雲中学校2年	渡 部 葵	平和とは何か	11
優 秀 賞	附属釧路中学校3年	高 橋 優 奈	復興する力、想い	13
佳 作	附属釧路中学校3年	檜 森 海 希	未来の世界平和へ	15
佳 作	附属釧路中学校3年	小 田 侑 季	骸	17
佳 作	附属釧路中学校3年	鈴 木 理咲子	「人間」らしく	19
佳 作	附属釧路中学校3年	西 本 歩 真	戦争の重み	21
佳 作	桜が丘中学校2年	塚 田 くるみ	平和な令和	23
佳 作	景雲中学校3年	越 浦 勇 斗	少年口伝隊 一九四五	25
佳 作	阿寒湖中学校3年	安 井 水 滢	あたり前ではない	27
佳 作	音別中学校2年	長谷地 恋 春	二重被爆者	28

第18回平和の主張コンクール

最優秀賞	釧路湖陵高校2年	樋 渡 羽 奏	我々が堅持すべき平和	29
優 秀 賞	釧路北陽高校2年	川 名 梨 央	人それぞれ	31
優 秀 賞	釧路北陽高校2年	加 藤 竜 美	平和について	32
優 秀 賞	釧路湖陵高校2年	森 紗 那	百聞は一見に如かず	33
優 秀 賞	釧路北陽高校1年	小 林 彩 夏	平和は自由を守り、自由は平和を守る	35
佳 作	釧路北陽高校2年	萩 野 風 咲	平和を願わない人は誰もいない	37
佳 作	釧路江南高校2年	本 宮 朋 佳	核兵器の持つ悪影響	38
佳 作	釧路北陽高校2年	岡 部 琴 音	本当の「平和」とは何か	40
佳 作	釧路北陽高校2年	高 山 春 花	戦争のない世界	42
佳 作	釧路江南高校2年	足 立 篤 駿	平和の祭典オリンピック	43
佳 作	釧路明輝高校2年	八 巻 柚 葉	平和のために	44



第19回平和絵画コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）湖畔小学校3年

あべ こうた
阿部 晃大



第19回平和絵画コンクール

優秀賞（釧路市議会議長賞）清明小学校5年

おだじま ゆうな
小田嶋 柚夏



第19回平和絵画コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）釧路小学校2年 こばやし ゆずみ 小林 夕純



第19回平和絵画コンクール
優秀賞（釧路青年会議所理事長賞）愛国小学校1年 はった こみね 八田 胡々音



第19回平和絵画コンクール
優秀賞（釧路ユネスコ協会会長賞） 鳥取小学校3年 いわた ちきと 岩田 知怜



第19回平和絵画コンクール
佳作 釧路小学校2年 まつだ もな 松田 萌那



第19回平和絵画コンクール
佳作 清明小学校4年 澁谷 葉奈



第19回平和絵画コンクール
佳作 清明小学校3年 池端 和々子



第19回平和絵画コンクール
佳作 愛国小学校6年 八田 凌弥
はった りょうや



第19回平和絵画コンクール
佳作 愛国小学校3年 笠島 悠愛
かさじま ゆうあ



第19回平和絵画コンクール
佳作 愛国小学校1年 細野^{ほその} 陽菜子^{ひなこ}



第19回平和絵画コンクール
佳作 鳥取西小学校4年 小林^{こばやし} 真奈美^{まなみ}

第3 2回平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

明日も

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 ^{ごとう}五堂 ^{かない}叶惟

「また明日ね。」

友達とあたり前のように交わす何気ない一言が、平和を意味している言葉だと初めて気が付きました。明日も会おう。そう誓うこの言葉は、とても希望があり、

「私たちは、明日も必ず生きて会えるだろう。」

「私たちには、明日がある。」

そんな、今の時代を生きる私たちにだからこそ、口に出して言うことのできる言葉の意味が込められています。

しかし、戦争という時代には、明日という言葉も、生きるという言葉も、会うという言葉すらも存在していませんでした。未来という時間軸など、無かったということです。

あなたの描く未来は、何色に光り輝いていますか。あなたの描く未来には、どんな光が差し込んでいますか。希望の色に染まっていますか。

一九四五年八月六日。あの日、あの時、あの場所に落ちた、一つの大きな光は、光り輝くこともなく、希望の色に染めることもなく、ただ、広島という町を、懸命に生きていた人々を、「絶望」という闇へ連れていくだけでした。

私は今回、満員電車で原爆を浴び、それでもなんとかあの時代を生き抜いた一人の少年のお話を読みました。母も妹も、祖父も祖母も、みんな彼の前から消え、彼に残ったものは、つらい後遺症だけ。その少年は言いました。

「もう死んだほうがましや。はよ死にたい。」

明日は生きていられるのだろうか。どうにか明日も生きていたい。不安や恐怖と共に、毎日必死に生きていた人間が、被爆し、心も体もボロボロにして、口から出す言葉は、
「死にたい。」

ただ、それだけでした。

もう戦争はしない。もう、核兵器は使わない。こんな言葉を、今に誓ったところで、戦争で苦しみ、原爆で苦しみ、消えていった命の数は、もう変わることなどありません。なのになぜ、私たちは、もう戦争はしない、と誓うのでしょうか。その答えは、もう二度と、絶対にあのような悲劇を、過ちを、犯さないためです。これ以上、戦争によって、原爆によって消えていく命を、増やさないためです。戦争で苦しみ、原爆で苦しみ、消えていった命の数は、「変わらない」のではなく、「変えてはいけない」命の数なのです。

原爆は恐ろしいから使わないのか。原爆は危険だから使わないのか。原爆は、街を破壊

するから使わないのか。いいえ。原爆は、人を殺すから、使ってはいけません。人が死ぬから、使ってはいけません。

こんな、子どもでもわかることを、あの時代の大人たちは、どうしてやめられなかったのでしょうか。私は、不思議で、不思議でたまりません。

日本という国のステータスには、こんなものがあります。「世界で、唯一の、被爆国。」世界でたった一つしかない、国のステータス。でも私は、こんなステータスのある日本という国に生まれたことを、嫌だとか、恥ずかしいだとか、そんな風に思ったこと、一度もありません。むしろ、日本人として、この国に生まれたことを、とても誇りに思っています。なぜなら、平和の尊さについて、根拠を持ち、世界の人々へ伝えられる権利を持っているように感じるからです。

少年は語りました。

「ぼくは地獄というものを見たことがないし、それがどんなところか考えたこともなかった。あとになって、この日の広島のような、多くの人たちが、地獄だったとか地獄絵だとか言った。ぼくも、あれは地獄だった、と確信するようになった。」

誰もが地獄だと言った、あの頃の日本の姿は、今は目に見えません。今の日本には、戦後、ずっと守り続けてきた、平和があります。

被爆国である、というステータスを持ったこの国に生まれた私たちは、その言葉の意味や重さを理解し、これから生きる未来へつないでいかなくてはいけません。

明日も生きたいと願う人がいました。明日もあの子に会いたいと願う人がいました。叶わなかったその願い。もう叶えることのできないその願い。

でも、今の日本には、今日も生きている人がいます。今日も明日という日を約束している人達がいます。

「また明日ね。」

友達とあたり前のように交わす何気ない一言が、こんなにもわかりやすく平和を意味しているすてきな言葉だと、初めて気が付きました。

第3 2回平和図書読書感想文コンクール

優秀賞（釧路市議会議長賞）

本当の「平和」とは

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 佐藤 夕愛

一九四五年、八月九日、午前十一時二分。長崎市に原子爆弾が投下された。誰も予想なんてしてもしなかった事がこの日、この時間に多くの人々を襲った。一瞬にして辺り一面焼け野原が広がる。私達はこのような状況になって追い込まれた事は無い。だからこそ今生きている私達が戦争の恐ろしさと共に今の生活を再度見つめ直し、平和であることの大切さを深く学び、考えるべきなのだ。

そこで私は「平和のたからもの」という本に出会い改めて戦争の恐ろしさ、平和であることの大切さについて考えることができた。

この本に記されている通り、原爆の熱線をあび、炎に包まれた人々は熱さと苦しさから「水がほしい」と何度も何度もうめきながら亡くなられていった。考えただけでも苦しく現場を想像できると思う。今の時代のように人々が生きていくため、また日常の生活を送るためには欠かせない水がそこらじゅうにあるなんて当時の被爆されていた方々からしては考えられないと思う。このような状況から私達は当たり前前に存在している物、生きているという事に感謝すべきだと考える。

次に昔の人々は戦争は良い事だ。と教え込まれていたと言われている。私は正直納得できなかった。考え方は人それぞれ異なるのも当たり前である。しかし命が次々と失い、一命を取り止めた人でも家族や大切な人を失った心の傷はどれ程大きく心に深く刻まれるものか。私達の想像をはるかに超えるようなものだと思う。そんな戦争なら絶対にしない方がいい。命がどれだけ尊く重いものなのか。これからしっかりと向き合って考えるべきだと思う。

私達、附属釧路中学校四十九期生は去年の十二月に長崎を訪れた。そこでは亡くなられた、およそ七五〇〇〇人の人々への慰霊祭、今後の日本、世界中の平和を願った平和セレモニーが行われた。このように今自分達には何ができるのかを考え、できる限りの事を尽くす事はすごく大切だと思う。

次に私達は長崎市にある原爆資料館へ足を運んだ。初めに私が触れた「水」を求める人々の話のように、何かを必死に求め、生き延びようとする人、誰かのために懸命に足を動かそうとする人など実際見ると目をそむけなくなる光景が描かれていた。この場に行き、目にしたことにより戦争の恐ろしさがはっきりと目に焼きついた。

このように戦争とは計り知れない程の恐ろしさがあることを、わかっていただけただろうか。直接被害にあった人だけが苦しい、生き残っていた人は幸せ。そのような簡単で単純

なものではない。放射線被害を受けて苦しさを味わった人はもちろん、自分の命は助けられても家族を失った方々、大切な人や物を失った方々にも心の傷という大きな後遺症を抱えながら生きている人は少なくはない。

もう一度よく考え直してみて。私達がこれから生きていく中で何ができるのか。私はこの戦争の恐しさを知ったからこそ、二度とこのような事がおこらぬように後継者となり、自分達から伝えていくことができると思う。一人一人の意識が変われば。それが日本中、そして世界中に広まれば平和な未来が待っているだろう。

最後に、戦争で命を落とされた人々、今を生きる私達のためにも戦争というものは絶対に起こしてはならないと思う。全ての人々が平等で幸せな日々を送れるようになるために平和で居ることがどれより大事な事か。よく考えてみるべきだと思う。

本当の平和とはどんなことを指すのだろうか。

第3 2回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

平和とは何か

釧路市立景雲中学校 2年 ^{わたなべ}渡部 ^{あおい}葵

みなさんにとって、「平和」とは何ですか。「原爆 広島を復興させた人びと」という本を読み、私は平和について考えました。

この本では、広島に原爆が落ちた日から今日に至るまでの被爆後の復興の様子や原爆の恐ろしさについて述べられています。

一言でいうと、最初は「恐怖」でした。原爆が投下された直後を描いたシーンでは、次のように具体的に惨状が述べられています。『市街地の方から、頭から血を流している人、火傷でめくれた皮膚をぶら下げている人などが押し寄せるように逃げてきたのだ。』

私はこのような文章を読んで、情景を想像せずにはいられませんでした。想像すればする程、悲惨な状況が目に見えてきます。

戦争や原爆については小学六年生の時に社会科の授業で習いましたが、その時はどこか他人めいていて現実味を帯びず、ぼんやりとしたイメージしか持てていませんでした。しかしこの本を読んだことにより、それが過去に起きた現実のこととして一気に押し寄せてきました。

作中に登場するのは、主に四人の「広島を復興させた人びと」です。中でも私は、長岡省吾の生き様に興味を引かれました。

研究者であった長岡は、原爆が投下されてすぐに石で原爆についての多くの情報がわかるのではないかと確信しました。というのも、長岡の家は広島にあるのですが、原爆が投下された時には調査のために山口県にいて、被爆を免れたのです。

そして長岡は広島に戻ってきてすぐ、まだ惨状の渦中にあった市街地にいき調査を始めたのです。私はその長岡のまだひどい状況の中にある市街地へ赴く勇気と、行動力に感嘆しました。後に研究の成果は実り、国内外へ広まっていき、さらには集めた研究資料を展示する公民館の一室の責任者ともなりました。この一室はのちに広島平和記念資料館となり、広島の復興への大きな手助けとなるのです。

広島の復興にあたり、広島をかつて焼け野原にした原子力の平和利用の概念が広がっていきますが、人々の中には原水爆の禁止を求める反核運動をおこす人々がいました。私が当時生きていたら、私もそれに参加したいです。その発端はそれぞれのイデオロギーや党派を超えて一致団結して世界に対し原水爆禁止を訴えるべきだという声があがったからですが、この団体はのちに党派による意見の違いで分裂してしまいました。当初の目的をそのまま持続していけばよかったのに、なぜそれを分裂させてしまったのか不思議で

なりませんでした。

私は、ここに平和について考えるヒントが隠されていると思います。最初の目的である「党派を超えて一致団結」することは、「国境を越えて一致団結する」という風に世界へと置き換えられるのではないのでしょうか。

私がこの本を読んで考えた「平和」は、世界のあらゆる国の、様々な立場の人がみな幸せに生きてゆくことです。そのためには原爆なんて絶対落としてはいけないし、戦争などあってはいけません。世界中の人びとが少しずつ世界に目を向けて様々な国の人たちのことを考える。これだけで、平和へと少しずつ近づいていくのではないのでしょうか。

原爆は、罪のない人々の命をうばい、生き残った被爆者たちにも多大な心の傷を負わせ、広島という町を壊しました。けれど、今は平和都市としての役割をになっています。そこまでの道中にはその本に登場した人びとだけでなく、多くの人びとや広島市民のたくさんの方があつたことを忘れてはいけません。

ここでみなさんにもう一度問います。

あなたにとって平和とはなんですか。

この感想文を読んでもくださったすべての方々が、少しでも世界へ目を向け、平和について考えてくださることを私は願っています。

第3 2回平和図書読書感想文コンクール

優秀賞（連合北海道釧路地区連合会会長賞）

復興する力、想い

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 高橋 優奈

「原爆 広島を復興させた人びと 石井光太著」を図書館で借りてからも、なかなか私はこの本を読み始めることができなかった。被爆についてを知るには、そのリアルと正面から向き合わなければならない。皮がめくれ、腸がむき出しになる。眼球が飛び出たまま、生きている。その光景を、現実を、私たち若者は知らない。それは、戦争はいけないことだ、絶対に戦争をしてはならない、と伝えてきてくださった方々のおかげだ。だから、私たちも、自分たちの子供に、それを確かに伝えていくことが大切な使命なのだ。そのためには、こうして、戦争に関する本を読み、込み上げてきた感情をもとに、よく考えるべきである。これから、私なりの戦争に対する考えをまとめていこう。

読み始める覚悟を決め、開いたページから、広島が舞台になった話が静かに語り始める。「七十五年間は草木も生えぬ——」被爆後二週間以内に爆心地周辺に立ち入った人々は、多量の放射線を浴びた可能性が高い、と国によって結論づけられた。そんな状況下で、知人や身内の安否を確かめるべく、被爆直後の街へ向かった人々がいた。

長岡省吾という方は、当時務めていた大学の職場仲間の無事を確認するため、街に向かった。つい先日まで仕事を共にしていた仲間は皆、ひどい火傷やガラスの破片を被った。長岡さんは大学へ行く道中で、今後の彼の人生の方針を変える重大なものを発見する。休けいしようとして手をついた石の表面の変形に気が付いたのだ。花こう岩を変形させるには、約六〇〇度以上の熱が要ることを、彼は知っていた。なぜなら彼は、戦時中の日本で数少ない、地形学の研究者であったからである。長岡さんは誰よりも早く、真っ先に原爆の内容に気付き、与えられた被害の大きさをつき止める研究に乗り出した人物である。彼は命をけずり、何度も何度も街に足を運び、撤去される前に、と被爆した石や鉄材などの重要な資料を収集した。当然、その際には資料に付着していた放射線にふれることとなったが、長岡さんは、必死に爆心地をつき止めるための研究に没頭した。そうした彼の功績が賞賛され、長岡さんが館長の資料館には、彼が集めた数々の資料、そして、少しでも役に立つことができれば、という市民の想いの込められた、被爆し亡くなった息子の着ていた制服、亡き父が食べようとしていた弁当箱など、貴重な遺品が今も展示されている。彼は生涯を広島の復興のために尽くし、広島の未来に、過去の出来事を伝えてくれた。

広島を「平和都市」として復興させるため、自ら広島に足を運び、大きな業績を成しとげた人々はたくさんいた。「原爆市長」と呼ばれた浜井信三さんは、被爆時に市の配給課長として大勢の市民を飢餓から救い、彼もまた原爆症にかかりながら、命をかけて新しい

広島を築き上げようとした。中学生の時に被爆して全身に重い障害を負って生き延びた高橋昭博さんは、浜井さんとともに全国を駆け回って原爆ドームの保存運動に尽力した。

彼らは自らの命を顧みずに焼け野原に向かったのだ。私はその想いをよく考えた。もし、自分が戦争の時代に生きていたら……。当時の十四歳と私では、大きく違っている。生まれた時から豊かな生活をし、好きなことに時間を費すことのできる今の私は、なんと幼く、甘い考えをもっていることか。辛く苦しい日々を乗り越え、必死に生きていた大勢の少女たちが、一発の爆弾で命を失った。生き延びた人々も、心身に深い傷を負って、懸命に生きた。その力を、今の私たちは忘れている。ひたすらに便利と楽しさ、刺激を求め、画面にとりつかれた私たちは。中二の冬、宿泊研修で清野さんという方から、被爆の体験のお話をうかがった。胸に迫る、苦しさ、心震える内容だった。世界では今でも核兵器が所持されている。その事実、ニュースできいても恐怖は感じない。知ろうとしなければ、耳を通り抜けるだけになってしまう。私たちは、日本が経験した出来事に、正面から向き合わなければならないのだ。この本を読むことによって、私は原爆を知った。辛い過去をかかえながら、自分たちの街を蘇えらせるために尽くした人々の想いを知り、私も戦争を防ぐ人間の一人となれるように生きてゆこう、と思った。

第3 2回平和図書読書感想文コンクール

佳作

未来の世界平和へ

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 檜森 海希

「平和」皆さんはこの言葉をどれほど重く受けとめているだろうか。そして、平和についてどのように考えているのだろうか。

私は昨年十二月に宿泊研修で長崎を訪ねた。その際に被爆体験談を語り部の方から、初めて直接聞くことができた。私は原爆の恐ろしさに声を失った。町を歩けば幽霊のようになった人々がたくさんいる。脱水状態になり、川へ水を求めに行けばたくさんの死体が流れている。元来の故郷は悲惨な姿に変わり果ててしまった。原爆の被害は被爆直後だけに及ばなかった。一週間後に今まで元気だった家族の様子が急変する。今現在でも放射のうによる病気で苦しい日々を送っている人々がいる。私は、長崎と同じ被爆地である広島八月六日の様子、それからのつらい日々が綴られている「僕は満員電車で原爆を浴びた」という本を読んだ。たった十一才で被爆した作者の言葉に胸をうたれた。思いだしたくない苦くつらい記憶、過去を世に伝え広めようとする心の強さは並大抵ではない。「家族が原爆によって殺された」「自分のたった一つの故郷が原爆によって破壊された」それなのにも関わらず平和を願い、語り続けている。

だが、未だ悲しい現実がある。一昨年、核兵器廃絶国際キャンペーン、I C A Nがノーベル平和賞を受賞した。この受賞は原爆がどれほど恐ろしいものなのかを世界に発信することのできた素晴らしいものだった。ただ日本は核兵器禁止条約に批准していない。日本是世界唯一の被爆国として核兵器の恐ろしさを語り、これ以上苦しい日々を送る人々をださないようにするべきではなからうか。語り部の方々の努力、思いを無駄にするのではなく、少しでも心が軽く、明るくなるニュースを届けてほしい。

私達には、未来のことを考え、家族と共に幸せな日々を過ごし、学校では勉強することができている。だが、原爆によって日常を壊され、歩むはずだった充実した未来をも失ってしまった。そんな方々がたくさんいるのだ。被爆して亡くなった方。救援のために被災地に入ったことで亡くなった方。未来を考えられなくなり自ら命を絶った方。病気だけではなく、心に消えることのない傷でたくさんのダメージを受けている方もいる。もう二度と無残なことしか起こらない戦争をしてはいけない。犯罪はいかなる理由があっても犯してはいけない。戦争も同じだ。どんな理由があっても人を殺してはいけない。そう、戦争は人殺し、殺人なのだ。

「平和」とは辞書を引くと「戦争や内戦で社会が乱れていない状態」とでてくる。本当に平和とはこれだけの意味しかないのだろうか。私は社会だけではなく、心の状態も考え

るべきだと思う。お互いを尊重し助け合う。笑顔で生活できる状態。社会の平和も大切だが、心の平和はもっと大切なものではないのだろうか。私はいつの日かこの世界から核が廃絶され、社会の平和と心の平和。共に世界中の人々が感じられる社会になることを願っている。世界が大きな輪となり、手をつなぎあえる日が来ることを信じて。

第3 2回平和図書読書感想文コンクール

佳作

骸

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 小田 侑季

この写真を、想いを、文字にすることはできない。

私は先日、長崎県長崎市の原爆資料館を訪れた。そこで一枚の写真を見てしまったのだ。「黒焦げの遺体のかたわらにぼう然と立ちすくむ少女／爆心地より南へ約300mの浜口町／撮影山端庸介」この写真を見た瞬間、私は固まった。自分と同年代の少女の足元にある黒焦げの死体、いや！それは骸なのだ。瓦礫の平野の上にある^{されこうべ}。男か女か子か成人か老人か日本人かアメリカ人なのか。空いた口から歯が覗く。ぽっかり空いた穴はどこも眺めていない。ああ！まず“あれ”が人なのだろうか。あの衝撃を言葉にすることはできない。

二〇一七年三月、私は広島を訪れ、原爆ドームを見、折り鶴を折った。そして先日二〇一八年十二月、私は中学校の宿泊研修で長崎を訪れるため、文化委員として原爆について調べ、平和宣言文を考え、平和セレモニーを行った。しかし、私はヒロシマとナガサキへの原爆投下を真剣には考えていなかったのだろう。原爆資料館に入った時、私は思った。「すごい風と熱だったんだな」「広島と同じ感じだ」そして“あれ”を見た。

私は頭に刻み込まれる。同じ人間が、同じ人間によって、太陽ほどの火球を受け、一万五千人もの人の皮膚が焼けただれ、肉と骨が露出し、目玉や内臓が飛び出し、鉄塔は曲がり、教会が崩れ、放射線によってまだ地球に存在していない孫の代まで病気に苦しんでいることを。

そして、この詩に出逢った。

コレガ人間ナノデス

原民喜

コレガ人間ナノデス

原子爆弾ニ依ル変化ヲゴラン下サイ

肉体ガ恐ロシク膨張シ

男モ女モスベテ一ツノ型ニカヘル

オオ ソノ真黒焦ゲノ滅茶苦茶ノ

爛レタ顔ノムクンダ唇カラ洩レテ来ル声ハ

「助ケテ下サイ」

ト カ細イ 静カナ言葉

コレガ コレガ人間ナノデス
人間ノ顔ナノデス

私は繰り返し読んだ。そして恐しさを感じたのだ。

この詩はカタカナと漢字で書かれている。「これが これが人間なのです／人間の顔なのです」とあるより、よっぽど怖くなかろうか。感情が入っておらず「オオ」でさえも機械的に発しているように感じたのだ。

作者の原民喜が被爆したのは、生まれ故郷の広島、爆心地からわずか1.2kmの生家に疎開していた時だった。原は奇跡的に生き延びた。がれきの中で目を覚ますと、周りにはめっちゃめっちゃになった家族と死ねずに生き残った動めく死体だろうか。体験した者だけが知っている当時の様子を、詩の中で残酷に、生々しく、書き残している。

そして、そこには感情がない。多くのむごい被害を見て、心が麻痺してしまったようだ。もう何も考えられなくなった思考回路で死の淵を彷徨っていたのだろうか。

「ドウカ水ヲ…」

「助ケテ下サイ。」

「声」と「言葉」、詩の中で表現が異なっている。骸から洩れてきた音、呻き「声」のようなものは、よく聞くと微かな「言葉」だった。当時、原が感じたことが私も鮮明に想像でき、気持ち悪くなった。

人は人を殺すと重罪になる。国と国の争いの中では、人は人をたくさん殺すほど褒められる。それは一九一四年も、一九三〇年も、現在でも同じだ。2つの作品に出逢って、今私の中にあるのは怒りと悲しみ、そしてこれまでにはない決意。あの風景を、あの経験を、またも味わうことのないように。

これから一つ一つ成し遂げていきたい。

第3 2回平和図書読書感想文コンクール

佳作

「人間」らしく

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 鈴木^{すずき} 理咲子^{りきこ}

一九四五年八月八日の長崎において、誰が「明日」の長崎の街並みを想像したのだろうか。誰が「明日」の自分の運命を予測していただろうか。

私は「明日 一九四五年八月八日・長崎」という本を読み、「今日」を懸命に生きる人々、「明日」に希望の思いを馳せる人々から、人間としての在り方を学んだ。私達が今、忙しく動き回って生きているように、七〇年以上前、戦時中の長崎、広島に住んでいた人々も日々奮闘して生きていたのだろう。当然、同じ人間なのだから、現代と同じように人それぞれ暮らしは違っていただろうが、例えば私が読んだ本には、結婚式を挙げた新郎新婦、何時間にも及ぶ苦痛に耐え、出産をした妊婦、刑務所にいる夫に接見する妻などが登場した。どの人物も感情は異なっているものだと思うが、明日が来なければいいと言う人がいたように思えるだろうか。もちろん、明日を前向きに考えている人だけではなく、病気に悩まされる人や家族を戦争で亡くしてしまった人もいる。その場合、明日に前向きになれる訳がないと思う。けれども、そのような人々も明日に対して前向きではなくても、今日という日をめげずに生き抜こうとしていたはずだ。世の中には戦時中でも生きようと強い意志を持っている人がいたであろうにも関わらず、一発の原子爆弾は、人々が様々な思いを馳せていた「明日」を消しさってしまった。

原子爆弾という核兵器はいったい何なのか。この問いに対して私は、ただ殺人兵器という言葉で済ませてしまっていていいものではないと思う。核兵器は地から家族・自然・希望・全てのものを奪い取っていく本当に恐ろしいものであるのだ。

私は昨年十二月に宿泊研修の一環として長崎へと出向いた。そこで、原爆資料館を訪れた後、平和公園へ行き、被爆者の方々に黙禱を捧げるといった活動を行い、戦争について、また原子爆弾について、自分が認識していた以上の事実を知ることができた。しかし、世界で唯一の被爆国である日本に住んでいながら、恐ろしい原子爆弾について分かったとしてもいかなかった自分を情け無くも思った。私のように怖いからといって過去に起きた日本の出来事から目をそむけているようでは、いつまで経っても本当の幸せを理解することはできないということを私は昨年の宿泊研修で学んだ。その学びがこの度読んだ本にも関連してくる場面があったと思う。

この本に描かれている世界は長崎に原子爆弾が投下される前日、一九四五年八月八日に人々が織りなす「人間」の生活である。誰にでもくる「明日」。私達はそう思って日々の生活を送ってはいないだろうか。「明日」は誰にだってやって来る訳ではないということをし

っかりと知るべきだと思う。この本に出てくる人物に、舞台となる一九四五年八月八日の「明日」に、次にやって来る「明日」を感じさせる余裕はあったのだろうか。きっと中には生きる気力さえ失ってしまった人だっただろう。しかし、言葉にできないほどの苦しい思いをされたであろう被爆者の方々は、戦争を世に伝えるため講話活動をしているが、現在日本にいる被爆者も平均年齢が七〇歳以上となっており、過去の日本での出来事を伝えていくのも難しくなっている。戦争の事実がこの先脈脈と語り継がれていくためには、これからの時代を担う私達が責任を持って後世に伝えていく必要があり、それが今の私達にできる「平和」を守ることでもあると思う。この世界から一刻も早く核兵器が無くなることを私は願っている。

そして、私がこの本から学んだ人間としての在り方とは、常に勇気を持ち続ける反面で時に泣き、時に甘えるというような「人間らしい」姿でいることだ。登場人物は皆、感情豊かに喜怒哀楽を全面に出している。私はそんな「人間らしい」姿を尊敬する。

第3 2回平和図書読書感想文コンクール

佳作

戦争の重み

北海道教育大学附属釧路中学校 3年 ^{にしもと}西本 ^{あゆま}歩真

今の日本人は、「戦争の重み」をどのくらい知っているのだろうか。今の日本は他国を制するための戦力を持たず、戦争で亡くなった人たちの思いをくみ取り、平和な国を目指している。人間たちの尊い命を人間が奪い合い、痛みや辛さを耐えて生きていた時代から便利な生活環境に変わり、機械と人間が共存している時代に移り変わっていった。しかし、この現状は本当の平和なのだろうか。

昨年、私は平和の在り方を知るために、宿泊研修で長崎県を訪れた。その際に被爆体験講話を聞くことができた。当事者からの言葉は私の想像をはるかに超えた現状だった。当時の思いを教えてくれた人は七十三年後の今でも講話を続けている。その人の姿に私は感銘を受けた。

しかし、私はまだ日本だけの立場でしか考えていない。他の考えも知りたかったので、ある一冊の本を読んだ。そこには驚くべき事実が書いていた。

「広島への原爆使用が、パールハーバーを奇襲した日本人に対する報復であり、極東の戦争責任者への懲罰であると声明した。」

私はこの文を読んだ時、大きな衝撃を受けた。私が読んだ本「ナガサキ一九八五年八月九日」には、今では考えられない悲惨な光景が詳しく綴られていた。その様子は、まるで地獄のように目に浮かんだ。賑やかな町を一瞬で消したアメリカは、自分たちの立場を必要悪と考えていた。

日本は唯一の被爆国である。今でも原爆の被害が続いている人も大勢いる。なのに、世界の核の廃止に参加しようとしていない。更に、このまま時間が流れ続ければ、日本人の記憶から七十三年前の悲劇は忘れられてしまうと思う。原爆の恐怖と辛さに対する風化と忘却が、正しい日本の歴史を知ることができなくなる。そのために、私達はいまこそ、被爆者や戦争を経験した人たちの声に耳を傾ける必要があると思う。もし、私たちが戦争を体験し、その時の様子が後世に伝えられていなかったら……。

戦争に明確な善悪はないと思う。日本も戦争で「勝利」という結果のために、沢山の命を奪ってきた。しかし、戦争とは無関係の人たちに大きな傷を負わせ、町を焼け野原として、建物を壊した兵器、それが原爆なのである。私は原爆は絶対に必要のない兵器であり、被害に対して忘れてはならない一つの歴史であることを学んだ。

時代は常に変わりつつある。つまり、戦争を体験した人は少なくなっている。その人たちは青い空を見ることができなくても、一生懸命に明日に向かって生きていた。しかし、

現代の人たちは、命の価値を軽く考えてしまう。平和であるが故に、命の尊さを改めて考える必要があると思った。少なくとも、戦時中に自分の国のために戦った人たちは、自他の命を大切にしない世の中を望んではないと思う。だからこそ、正しい歴史を知り、未来に語り継ぐことで本当の平和が訪れるのである。

私自身も、平和な部分だけしか見ない世の中を変えていくために、いつまでも本当の歴史を覚えていたい。

第3 2回平和図書読書感想文コンクール

佳作

平和な令和

釧路市立桜が丘中学校 2年 塚田^{つかだ} くるみ

平成生まれの私は戦争を経験していない。両親や祖父母も経験していない世代。TVで見ることしかなかった。小さい頃にTVで見た「火垂るの墓。」幼かった私は物語や映像の全部が恐くて目を背けていたのだが、中学生になり、改めてこの作品を読んでみることにした。

これは、主人公の清太が妹のために一生懸命生きた話だ。舞台は兵庫県神戸市である。中学三年生の清太と四歳の妹節子と病気の母の三人暮らしだ。清太は私と年が近く興味が沸いた。幸せな生活が続くと思った矢先に神戸はB二十九による空襲を受けた。清太は、節子を背負って逃げる。私は、こんな行動が出来るだろうか。きっとぼう然として立ちすくむのではないか。清太達は生き残った。しかし、母は亡くなってしまう。二人の生活が始まったのだ。子供だけで生活するうえ、外で暮らす日々。外で暮らすなど私には考えられない。お金も稼げないし食料を確保することもできない。親に頼ってばかりだ。数日経ったある日、悲しいことがあった。いつもどおり清太が家に戻ると節子が死んでいた。大事な大事な妹が。清太は妹の髪の毛をなで続け、すでに冷えきった顔に自分の頬をあてた。清太は一人で火葬を行った。誰にも頼らず。私ならそんなそんなことが出来るだろうか。「妹が骨になる姿を見たくない、怖い」と、何も出来ないと思う。母も父も一番大事な妹ももういない。清太は何を思ったのだろうか。私も考えた。たくさん考えたがやはり大事な人を失った人でしか分からない気持ちがそこにはあると思う。その日から数日経ち清太は三宮駅で死ぬ。その腹巻きの中には節子の骨がドロップ缶の中に入っていたのだった…。

私は清太とは年も近いし兄弟がいるところも同じだ。だが私は、清太のような行動が出来るとは思えない。たった一人の妹の死を目の前にし、自分一人で火葬ができるだろうか。いや、できないと思う。なぜ清太はこんなにたくましく立派に生きることが出来たのだろうか。それは、大事な妹がいたからだと思う。戦争は一瞬で全ての物をぶち壊す。大事な家族や家、思い出。平和だった日常も。私は、戦争が起こらずみんなが幸せに暮らせることが平和だとこの本を読んで考えた。

だが今、憲法9条が改正に向けて話し合われている。憲法9条は「戦争をしません。戦力も持ちません。交戦する権利すら認めません。」というもののだが、昔の日本と同じ悲しみを繰り返さないよう、何十年も守られてきた。死んだ人々の命が無駄にならないようにと、決められた物であるのに。もし本当に改正されたらこの国はどのようなのだろう。この国は

血の海と化すだろう。そんな国は絶対に嫌だ。戦争で亡くなった人達の命を無駄にしたくない。私は憲法改正に反対だ。

今、十三歳の普通の中学生在が「9条を変えないで。」と考えた時、何ができるだろう。何もできないかもしれない。だが、戦争についての歴史は教科書で学ぶことは出来る。過去に日本で起きたことから目を背けず、しっかりと勉強したい。

平成から令和へ新たな一歩が踏み出された。令和は戦争がなく平成より平和な年になってほしいと心から思う。

第3 2回平和図書読書感想文コンクール

佳作

少年口伝隊 一九四五

釧路市立景雲中学校 3年 越浦 勇斗

「わし、口伝隊もやりたい。」

これは被爆した直後の広島のある少年が言った言葉だ。僕がこの少年の立場なら口伝隊をやりたいなんて一ミリも思わないだろう。僕がこの少年の立場ならお父さん、お母さん、兄弟を探すのに頭がいっぱいだっただろう。僕はこの少年、正確には三人だから少年達の事を心から尊敬する。

千九百四十五年（昭和二十年）八月六日、いつも通り、何げない日常を過ごしている広島の人々が一つの黒い物体によって悲劇におそわれる。その黒い物体は爆発し、青空を裂き天地を砕き、人や鳥、虫などを一瞬にして溶かしてしまった。黒い物体の正体は「原子爆弾」だった。そんな中、生き残った三人の少年達がいた。名前は、英彦、勝利、正夫である。三人は両親や兄弟を原子爆弾で亡くし行くあてがなかった。あくる朝、三人が歩いていると口伝隊という新聞などの代わりに口頭でニュースを伝える集団と出会った。そこで花江さんと運命的な出会いをするのである。彼女は英彦のお母さんの学校のお裁縫の生徒さんだった。彼女は三人にとっても親切にした。寝場所を与え、仕事を手伝えれば三回のご飯もくれたのだ。それは三人にとって願ってもいない事だった。そして、もう一つ彼らの今後に関わる出会いもあった。それが口伝隊である。その日から三人は口伝隊として広島中に情報を伝えるのだった。やがて戦争は終わりビール立ち飲み屋ができたり、喫茶店ができたり、新聞を自前で印刷できるようになったりと、少しずつ町が戻ってきつつあった。三人は変わらず、掘っ立て小屋に住みついたままだったがしばらくすると、正夫が原子爆弾の影響で発症する「原爆症」にかかってしまう。残る二人は、正夫を交代で看病していく。そこに追いうちをかけるように土砂崩れが起きて、高潮がおしよせ、勝利を含む多くの人の命が失われた。その後、残された英彦も原爆症にかかり、けっきょく三人全員が小さいうちに生涯を終えてしまう。残酷だが、少年隊が被爆した後ももがきながらたくましく生きる姿を描いた物語である。僕がこの本を読んで心をうたれた部分が二つある。

一つは、少年達が原子爆弾を落とされ、両親を亡くし、兄弟も亡くし、環境ががらりと変わった世界で、花江さんという人物に会い自分達で今後をどう生きるか考え、生き地獄の中、もがき生きようとする姿がとても感動的に思えた。実際に、今の時代の小学六年生が、自分の町に原子爆弾を落とされ、両親、兄弟などの生きるかてをなくしたら、ここまで自分で生きようと考え、もがけるだろうか。家族をなくして悲しむのは当たり前だし、一度で全員を亡くしたら自殺も考えてしまうだろう。そんな状態であるのに、とりあえず

生きようとし、そして、口伝隊の手伝いをして人の役に立つことをしている。だから、この少年達は本当にすごいと思うし、僕も現在から、どんなに辛い時でもあきらめず最後まで物事にとりくむことと、将来、人の役に立つ仕事につきたいと心から思った。

もう一つは、戦争の恐しさについてだ。僕は、平成生まれで正直戦争とは実際はどのようなものなのか、日本はどのような状況にあったのかはあまり実感が湧かない。歴史としてしかふれていないのだ。だが、インターネットなどで被爆して生き残れた人達の話の動画を見ると、必ず、生き残った人達には後遺症が残っている。また、話からも戦争がどれだけ酷いものだったのかがわかった。ここ最近では、北朝鮮がミサイルを作り、うってきたりする出来事もあった。ここで思ったことは、後世にも戦争の恐しさとあってはならないものだとなげなければならぬということだ。元号も変わり、令和という新しい時代が始まるが、これから先、令和で生まれる人達にもこの原爆の事を伝えていかなくてはならないと思った。

僕は、この本を読んでいくうちに戦争に対する見方が段々変化していくのを感じた。今の若い人達はきっと戦争や原爆なんて起きやしないと思っている人が大半だろう。だが、この本でもあるように、原子爆弾なんかは前振りなんてなく突然落ちてきて、一瞬で地獄に変えてしまう。もっと社会の変化に一目をおいて二度とこの悲劇が生まれないように意識を変えるべきだとこの本を読んで改めて思った。今後、各国どうしが手を取り合い永遠に戦争のない世の中になることを切に願っている。

第3 2回平和図書読書感想文コンクール

佳作

あたり前ではない

釧路市立阿寒湖中学校 3年 ^{やすい}安井 ^{みお}水澤

私は、「あの日、家族が消えた！」という題名にひかれこの本を読んでみることにしました。

いつ何が起きるかわからない、何事も他人事ではない。この本を読んでそう感じました。

私は、戦争や原爆にあったことはありません。この本には、「家族が消えたのです。遺体も遺骨も見つかりませんでした。だから私は、父や母や姉妹の死を信じることができませんでした。」と書いてありました。そのくらい、あたり前だったことがあたり前ではなくなるというときは、いつくるかわかりません。

私は、「明日だれかに会えないかも。」「一日の価値はみんな同じ。」など思ったり聞いたりとすると、「そっか、今日を一日一日を大事にしなきゃ。」「後悔しないように、やりたいことをしよう。」などとその時だけ、そう思います。ですが、あたり前に今日があってあたり前に明日があると思って、いつも通り過ごしていて、あたり前だったことがあたり前ではなくなるというときのことを毎日考えて行動している人はあまりいないと思います。ですが、親しい人や友達や家族が突然いなくなったとき、きっと後悔する人がたくさんいます。

このようにあたり前だったことがあたり前ではなくなること、いつ何が起きるかわからないことは、誰にも予測できないことばかりです。その時の行動、その時の発言は、本当にそれでいいのかをしっかりと考えた方がいいと思いました。

この本を読んで、この本の書いてある通りのことが自分のことになる可能性もあるということがわかりました。テレビや新聞にのっている事件、事故もそれが自分だった場合もある、いつ何が起きるかわからない、何事も他人事ではないことを意識して、これからは自分事のように少しずつでも考えていきたいと思いました。

第3 2回平和図書読書感想文コンクール

佳作

二重被爆者

釧路市立音別中学校 2年 ^{はせち}長谷地 ^{こはる}恋春

二重被爆者がいたことをみなさんは知っていますか。八月六日に広島で被爆し、三百キロ離れた長崎で三日後にもう一度被爆した人々のことです。今回私は「キノコ雲に追われて」を読んで初めてその存在を知り、改めて原爆はどのようなものだったのかを深く考えることができました。

二重被爆者には長崎へ行ってしまった人と行った人がいました。行ってしまった人の中には短すぎる幸せな新婚生活を過ごし、一瞬で妻を失う人がいました。その男性にとっては悪夢でも、道の端にあるたくさんの死体ではなく、家で妻として見つけてもらえただけでも幸せに思えました。行った人は風を作るために広島にいた職人が多く、次に爆弾が落とされるなら長崎だろうと予測したにもかかわらず、家族に会いたいという自らの意志で帰って行きました。自分の命より欲望を選ぶというのは字だけで見ると生きたい人が死んでしまったのに自分勝手だ、と思う行動ですが、その裏にはたくさんの家族への愛情があったのだと思いました。離れて初めて気がつくことではありませんが、死にそうになって初めて気がついたことが自分の大切なものだったのではないのでしょうか。私にも本当に大切な存在ができれば良いなと思いました。

今の世界は原子爆弾の被害者をまとめて戦争の被害者として考えていると思います。しかし私は、起きてしまった戦争は一つ一つ見つめていく必要があると思いました。決して被害の大きさに順位をつけるわけではありません。ですが、生きていても後遺症に悩まされ体にも心にも深く傷が残ってしまう怖さを私も含め原爆を経験していない人間は本当にわかっているのでしょうか。もっと特別に一人一人が意識をしたほうが良いのではないのでしょうか。これからの日本のためにも。

そんなことを九人の二重被爆者から学びました。思い出したくない複雑な思いがあったと思います。それでも未来のために伝えないといけない、直接ではなくてもたくさんの命をうばえる物がこの世界にできてしまったのだから。

第18回平和の主張コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

我々が堅持すべき平和

北海道釧路湖陵高等学校 2年 ^{ひわたり}樋渡 ^{わか}羽奏

「国の内外、天地とも平和が達成される」という願いが込められた「平成」も終わりを告げた。振り返れば、日朝首脳会談や現職アメリカ大統領の広島初訪問などに、日本中が歓喜に沸いた三十一年間だったと思う。それとは裏腹に、同時多発テロや北朝鮮のミサイル発射など武力や暴力の行使も少なくなかった。戦争のない世の中になっても痛ましく残虐な行為は根絶されないということが悲しくてならない。

私は、生きていることこそが最高の平和であると考えている。生きているから家族や友人と会話を楽しむことができる。明日への希望を持つことができる。日常を送ることができる。一方、七十四年前の日本はどうだ。原爆の投下により家族、住居、夢をも奪われ「生きる」だけで精一杯だった。一瞬で大勢の人が亡くなった。一命はとりとめたものの心身に深い傷を負い、苦しんだ人もいた。また、一度に家族を亡くし孤独を感じた人もいた。「生きられる」ということが至極当然となっている今だからこそ「生きる」という信念を貫いていく風潮や意思も大切であると考えます。

昨年、広島市で行われた慰霊式に参列する貴重な機会を頂いた。その日は三十八度を超える猛暑だった。私は、あの暑さを今でも忘れることはできない。七十四年前のあの日は何倍、何十倍と熱く、苦しかったはずだからだ。原爆が投下された同日同時刻には約五万人が参列した。その中に多くの外国人がいたことに大変驚かされた。犠牲者を追悼するための長い列を見て、日本国外でも原爆の恐ろしさは風化していないこと、関心を寄せて犠牲者を悼んでくれていることに日本人の一人として心からの感謝の念を抱いた。これからも日本が、そして世界中が戦争のない平和な世で在り続けてほしいとも同時に願っていた。

先日、戦没者の遺骨のDNA鑑定にまつわる投書記事を目にした。「遺骨が兄弟のものかを特定できなかったことに無念さを感じた」という内容だった。半世紀以上も前に終結した戦争だが、被爆者や遺族の心の中での戦いは未だに終結していない事にも無念さが残る。

「日本は平和ボケしている」と言われているが私は結構なことだと思っている。むしろ誉め言葉とらえている。

しかし、平和な世の中を維持するためには莫大なエネルギーが必要だ。外交上の会談では必ず意見のぶつかり合いがあるからだ。常に円滑な話し合いなど存在しない。自国の経済発展、ひいては国の発展に必要な不可欠な問題についての話し合いの場だからだ。話が断裂し、国同士の間に亀裂が入ると味方となってくれそうな国を探し、団結する。その瞬間から決裂した国は相手国に対し制裁を加え始める。今は武力こそ使われてはいないが、い

つ行使されてもおかしくはないのが現実だ。妥協ばかりすべきとは思わないが、互いに協力できる関係を築くことが外交の本来あるべき姿であろう。

戦争当時は、国益を守るために武力を使うことに多くの国民が賛同した。ところが、たくさん犠牲者が出る中で「戦争という外交問題の解決の手段は間違えていた。」ということに気づいたからこそ今の日本がある。平和大国と呼ばれる日本がここにあるのだ。

戦争のほとんどは外交問題から始まる。それは約一万年以上前から変わらない。だからこそ、戦後の政権には戦争を体験した政治家が必ず入閣してきたのではないか。しかし、時代は流れ、戦争を知る政治家も減っていることに不安を感じる。戦争を知らない人たちだけで日本を築いていくことを想像するだけで恐怖を感じる。同じ過ちを繰り返してしまう可能性も否めないからだ。このような事態に陥らないためにも、私たち若い世代が戦争の残虐さについて理解をしておくことが何よりも大切だ。有権者という立場で選挙を通じ、社会を背負っていくことで私たちにも未来の日本に迫る危険を阻止することができるはずだ。ただ、世の中を動かすことができる年齢になってから急に戦争について理解を深めても意味がない。当時の苦悩、悲慘さ、体の痛みを心から感じることは一朝一夕には難しいと考えるためだ。

日本の歴史上に「戦争」という事実があったと知った時から、その痛みに触れておく必要がある。戦争を二度と繰り返さないためにも、過去の過ちから目をそむけてはならない。世界中で戦禍について語り継がれていくことこそが、戦争で苦しんだ人たちへの報いになるのではないかと考えるからだ。

令和の時代を未来への希望と共に生きていくためにも、私たちの手で恒久平和への道を切り開いていこうではないか。

第18回平和の主張コンクール

優秀賞（釧路市議会議長賞）

人それぞれ

北海道釧路北陽高等学校 2年 川名 梨央

私が主張する「平和」は、戦争が起こらない社会に限らず、この世に生まれた皆が声を大にして「生まれてきて良かった」と思える社会かどうかだと考えました。

この世には、様々な人がいます。性別が男性である人、女性である人、大人、子ども、肌の白い人、黒い人、黄色い人。更には生まれつき障がいを持つ人、物心ついた時から同性が好きな人、血の繋がりが無い家族を持つ人。本当に色々な人がこの世に生まれ、今現在でも生きています。

しかし世界には、肌の色やその人の好み、家柄で人を差別するような人も今現在生きているのです。

人種差別のことに关しては、日本ではあまり馴染みの無い問題だと思います。それは日本に住んでいる人のほとんどが『日本人』だからです。これは当たり前なことなんかではありません。自分と毎日顔を合わせ楽しくお話をするクラスメイトに、外国人はいますか？近所に住むおじいちゃんやおばあちゃんに外国人はいますか？自分がよく行く街で外国人とすれ違いますか？ほとんどの人がノーと言うことでしょう。でもアメリカではクラスメイトの国籍や人種はバラバラです。小さい頃から住んでいる街で自分と容姿の違う人とすれ違うことだって日常的にあることでしょう。その点、アメリカでは人種差別に対する関心が高いです。

では、日本に人種差別はあるのでしょうか。正直そのようなことはほとんどありません。それは先に述べた通り周りの人のほとんどが日本人だからです。しかし、差別がない訳ではありません。この国には同性婚が認められていません。「結婚できなくても一緒に住んでいれば良いじゃない」と思う人もいるかと思いますが、新居への入居、病院での面会などで同性カップルが拒否されることがあるのです。日本で起こっていることですが、このようなことに対し知らない人がほとんどだと思われます。

この世に様々な人がいることで、様々な差別が生まれます。自分の人種や好みを否定することもされることもなく、一人ひとりが認められることで皆が「生まれてきて良かった」と思えることでしょう。自分に関係のないことでもこの世に差別がある事実を心に留めておくだけでも、少しずつ差別社会を変えられると、私は思います。差別のない社会が少しでも広がるよう、願っています。

第18回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

平和について

北海道釧路北陽高等学校 2年 加藤 竜美

「戦争を起こしてはならない」というこの言葉は、以前私の学校でお話をさせていただいた被爆者二世の方が言っていたものです。私達のような若い世代は戦争を知らずこの言葉の重みを理解できていないかもしれません。講話の中では被爆時の写真を見せていただきましたが、私達の今の生活からは考えられないような光景がそこにはありました。私は今まで授業やニュースなどでしか広島や長崎への原爆投下については詳しく学んできませんでした。この講話の中で現地にいた人々が何を思い何をしたのか、どのような被害を受けたのか初めて詳しく聞いて悲しく思うと同時に今の私達のような世代に、この先同じことが起きないために何ができるかを考えました。一瞬で多くの命を奪ってしまう戦争はもう二度とあってはならないと強く思いました。そう思うと、戦争はひどく残酷で悲しいものだと思います。戦争が核兵器が銃が差別がなくなれば必ずしも平和になるとは限りませんが、少なくとも失われる命が減り平和へ一歩であることは間違いないのです。その日を境に大切な家族、友人、恋人に会えなくなるのはとても悲しいことです。戦争を知らない私達に今できることはたくさんあるはずなのです。戦争について深く知ること、それを私達よりも若い世代に伝えること、一人一人が尊重し合い思いやること、命を大切にすること。今すぐにでもできることはたくさんあるのです。そして私はこれらの一つ一つが平和への一歩なのだと思います。しかし、世界に目を向けてみると多くの争いが起こっています。これははたして他人事なのでしょうか。世界中に争いがなく不公平のない世の中を平和とよぶと私は思います。私は自分のできることをやりながら平和を願うことが大切だと思います。

アメリカは原子爆弾を投下する際、「これは戦争を終結させる力を持っている」と言ったそうです。本当にそうだったのでしょうか。あの時、大量の放射能を浴び今も病気と闘っている人がいます。これをはたして終結と呼ぶのでしょうか。この事を思うと僕は胸が苦しくなります。戦争で亡くなった人、今もなお闘っている人がたくさんいます。そんな人達をもうこれ以上出さないように私は伝え続けると被爆者二世の方は言っていました。

このように、二度起こさないと何度言おうと戦争は繰り返されています。原因は何でしょうか。言葉の違いでしょうか肌の色や宗教の違いか貧富の差でしょうか。この違いは変えられませんが、この違いをどう思うかは変えられます。

私達はこれから銃を手に取り、戦争を起こすのではなく、互いの手と手を取り合い平和を願うべきなのではないのでしょうか。私はこれまで戦争で命を失った人の死が無駄にならないように、にらみ合うのではなく笑い合う世の中を願い、つくっていくことが大切だと思います。

第18回平和の主張コンクール

優秀賞（釧路市連合町内会会長賞）

百聞は一見に如かず

北海道釧路湖陵高等学校 2年 ^{もり}森 ^{すずな}紗那

『広島をまどいんさい。うちの体をまどいんさい。』と母はいつも言っていました。」こう語るのは、昨年広島を訪れた際に出会ったタクシードライバーの男性です。「まどう」とは広島の方言で、治すという意味です。男性は被爆二世の方なので実際に戦争を経験してはいないのですが、戦争・核兵器への恐怖や怒り、母親の体を蝕む原爆病の恐ろしさを、母親から沢山聞かされたそうです。「あれから日本とアメリカは仲良くしようということになったし、アメリカの知識や製品、政治面でも日本は助けられてきていると思う。オバマ大統領も参列して下さった。でもね、僕は母を、そして広島を見てきているからね、簡単には許せないんですよ。誰が何を言おうと、私はアメリカが嫌いです。」広島を“まどう”ことはできても、人々の気持ちは今だ“まどう”ことができていないという現実を突き付けられました。

その三ヵ月後の昨年十一月、日韓の交流が目的のJ E N E S Y S 訪韓団として、韓国へ訪れる機会も頂きました。日本と韓国の間には、植民地の問題や従軍慰安婦問題、最近では、K-P O P グループのメンバーが着用していた原爆Tシャツをめぐる問題や韓国が日本の自衛隊にレーダーを照射したとされる韓国海軍レーダー照射問題等があり、二カ国間の溝は深まるばかりです。丁度この時、韓国へ行ってきました。事前説明会では、外出時、特に夜は大声で日本語を話さないようにと注意を受け、期待で胸が膨らみ浮かれていた私でしたが、緊張が走りました。しかし、私が韓国で接した人達は皆、親日の方ばかりで、中には日本語の上手な方も多く、帰国後もSNS上で会話して下さる方もいました。反日というのも極一部の人の話なのかなとさえ思ったりもしました。しかしながら、私が今回関わった韓国人は、私が韓国の歌、コスメ、文化が好きであるように、日本の文化が好きな若者です。親日の方ばかりでないと思い知らされたのは、帰国後に報道を見た時でした。収まっていたと思っていた原爆Tシャツの騒動が寧ろ激化しているのを見た時でした。日韓の間にまた壁が隔てられたように感じました。

広島と韓国。そこには行ってみないと分からない事が沢山ありました。戦争に関する本を幾度となく読み、歴史について沢山勉強してきましたが、実際に訪れて得られたものは大きかったです。同時に、何も知らなかったことに気付かされました。韓国の高校で「東アジア史」の授業を一緒に受けさせて頂きましたが、先生からの質問に韓国の生徒は皆正しく答えられていたのに対し、日本人生徒は答えられない質問がいくつかありました。韓国では、韓国史、世界史、そして東アジア史の勉強をしており、もう二度とあんな事にな

らないようにと、危機感を持って日々学業に専念しているそうです。私達は、過去に何があったって何をしてきたのか、今以上に勉強しなくてはなりません。そして、今のこの生活がどれ程幸せでどれ程平和なことなのか、気付かなくてはなりません。私は初め、レーダー照射事件について何も知らず、聞いたことがある、という程度の認識でしかありませんでした。いずれ収まるだろうと思っていたこの事件が世界中でも問題になっていることを知り、インターネットで調べてみました。このような過ちが戦争の火種になる、と分かった瞬間、背筋が凍りました。なんで今まで調べようとしなかったのかと恥ずかしさすら感じました。もし戦争にまで発展したら、広島原爆資料館で見たケロイドの女の子のようになってしまうのだろうか、いや、あの黒こげの赤ちゃんのようになってしまうのかもしれない。例えば自分が生き残っても家族等の大切な人が帰らぬ人となったら、誰に何を言われようと一生恨みながら生きていくのだろうか、タクシードライバーの男性のように。そう考えた時、私はこんなに幸せだったんだと気付きました。今、私は当たり前のように高校に通い、学習と部活動に打ち込んでいます。また将来の大学入試に備え、塾に通う日々を送っています。時に自分の思うようにならないことに腹を立てることもあります。しかし追いかける夢があることこそが幸せだと、広島や韓国を訪れて気付くことができました。

戦争でできた傷はいくら賠償があった所で消えず、許せず、忘れられず、繰り返してはいけない——韓国人も被爆者も言います。歴史は忘れない為にあるものです。過去の悲惨な歴史を忘れず繰り返さない為にも、脅威にさらされないこの毎日こそが平和の象徴であることに気付く必要があります。そしてこれが私達にできる恒久平和への第一歩ではないでしょうか。

皆が平和だ、幸せだ、と思える未来が来ることを切に願っています。

第18回平和の主張コンクール

優秀賞（釧路市連合町内会会長賞）

平和は自由を守り、自由は平和を守る

北海道釧路北陽高等学校 1年 小林 彩夏^{こばやし あやか}

私たちの人生の中で最も失ってはいけないものはなんでしょうか。きっとそれぞれの人に、それぞれの失いたくはない、大切なものがあると思います。しかし私は、全ての人が共通して失ってはいけないものは「自由」だと思っています。自由を失うということは、「人生の選択岐を奪われ、そして私たちが持っている可能性を奪われる」ということです。好きなことを学ぶ自由。夢を追いかける自由。自分の思っていることを表現する自由。

日本が太平洋戦争をしていた時、実際に多くの人々の自由が奪われてゆきました。そしてここ釧路でも「学ぶことの自由」や「表現の自由」が奪われた、残酷な弾圧事件がありました。『北海道綴方教育連盟事件』です。これは太平洋戦争中、小学校で作文教育をしていた教員たちが、治安維持法違反の罪で逮捕された事件で、『獄中メモは問う』という本によるとその数は三十市町村で五十五にのぼりました。作文を指導することが罪になるなど、今では想像もつかないことです。しかし当時は、少しでも戦争や国家に反することを言ったり、教えたりするものは、罪を犯したとされました。国家は国民を抑圧するために、素直な気持ちを作文に書くことさえできなくしたのです。当時の北海道の子供たちは貧困に苦しみ、小さいころから物を売り歩かなければいけなかったり、進学が叶わない子も少なくありませんでした。そんな中、先生は子供たちにその厳しい生活を、ありのままに作文にするようにと言いました。そして書き終えた作文を生徒同士で読み合い、友達が厳しい状況の中で努力しているのを知ると、「自分もがんばろう」と力が湧いたそうです。作文指導してくれた先生はとても熱心で、子供たちからもとても慕われていました。生徒の中には、先生の釈放を願う署名を集めて、綴方事件を担当している札幌の弁護士のところまで届けようとした人もいました。厳しい暮らしの中だったからこそ、小学校での先生との学びは本当に大切に、かけがえのないものだったのです。

私は今まで、いくつか太平洋戦争を題材にしたテレビや書類に触れる機会がありました。その時、周りにいた大人はよく「あなたと同じくらいの子が戦争でこんな酷い被害に遭ったんだよ」「あなたがもしこの時代に生きていたら、同じ被害に遭っていたかもしれないんだよ」と言いました。確かに当時に映像や写真、エピソードはすごく大きなショックとなって今も私の心に残り続けています。でもその分、リアリティを持って太平洋戦争を受け止められない自分がいました。太平洋戦争が、どこか遠くの国の話のように思え、近くに感じられなかったのです。でもこの綴方事件は違いました。文面や記録から、当時の人の絶望や、悔しさや涙がリアリティをもって胸に迫ってきました。きっとそれは、私も文章

を書くことを愛していたからだと思います。文章を書くことは、私に自信と夢を与えてくれました。だからこそ、自由に文章を書くことが罪になる世の中などあってはならないと強く思います。作文の他にも、戦争の影響でオリンピックに出るという夢を絶たれた若者がいたり、絵を描くことを弾圧された例もありました。そして「生き続ける」という選択さえも絶たれた若者がいます。私は二度と戦争で夢や自由が奪われるような世の中にしたくないです。

今日本は、SNSなどで自由に自分の意見を発信することができます。その根底には、日本が戦争のない平和な世の中だからというのがあると思います。そしてその平和は、だれでも自由に平和を主張できる世の中だからこそ存在します。平和は自由を守り、自由は平和を守っているのです。

核兵器や紛争など、世界にはまだ解決していない問題が山ほどあります。日本も、いつこの平和が脅かされるかわかりません。私たちは周りの空気に流されることなく、自分の意見をしっかり持って、平和を主張していく必要があると思います。

第18回平和の主張コンクール
佳作

平和を願わない人は誰もいない

北海道釧路北陽高等学校 2年 ^{はぎの}萩野 ^{なぎ} 風咲

平和とは何かを考えた時、色々なことが頭に浮かんできた。戦争・テロがないこと、ケンカをしないで仲良く周りの人と過ごせること、病気になってないこと、ご飯を1日3食食べれること、当たり前な日常を過ごしてること、自分の思い通りに物事が進んでいること？私の中で平和というのは戦争やテロがないことだと思っていた。でもこの作文を書くにあたって平和とは何かを深く考えたら、それが本当に平和なのかを疑問に思ってきた。

そもそも戦争とテロが大好きで起こす人など誰もいない。それなのになぜこんな悲惨なことを起こしているのか私なりに考えてみた。

1つ目。「何かを変えたい。」現状に不満があって、今の幸せじゃない状態を変えたくて起こしている。政府や世の中に「助けて」と訴えてるのに何もしてくれない。その現状に失望してテロや戦争を起こしてしまうんじゃないか。そうだとすれば偉くて階級が上の人たちが得する世の中じゃなくて、老若男女で平等に話し合える世の中になればいいと思う。話し合いでは何も決まらない可能性のほうが高いけど、差別なしで話し合いをしたという事実があって初めて、テロや戦争が少し減るかもしれない。

2つ目。「未来のために。」今自分たちが犠牲になれば未来が変わるんじゃないか。自分自身が犠牲になればもしかしたら大切な人が今後幸せになるかもしれない。大きな争いごとには覚悟がなければできないと思う。テロや戦争は悪いこと。生きたかった人希望のある人夢がある人までも殺す大量殺人。許されないこと。でも大量殺人をする覚悟をその人に持たせたのは誰だろう？

3つ目。戦争の需要と供給。戦争またはテロがあればあるほど、武器をつくらしている人や会社・薬をつくる会社・包帯をつくる会社は儲かる。もしかしたら戦争があるから成り立っている国・地域もあるかもしれない。大勢の人が犠牲になってるからこそ成り立つ国。それはダメだと思う。私は日本という法があり平和な国で暮らしているから「ダメだと思う。」なんて能天気なことを言えるのかもしれないけど、「たくさんの人が死んで殺されて成り立つ」というのを当たり前にしたらダメだと思う。理想でも現実離れしていても、何か違う方法を考え続けることによって10年後にはどこか変わってるかもしれない。上に立つ者が良い理想を持っていることを庶民は求めていると思う。

テロ・戦争はあったらいけないもの。許されないこと。でも起きた後に「戦争・テロ反対！！」と口に出すだけではなくて、なぜテロを起こしてしまったのかを考えたり警備を強化する以外にも弱者の意見を聞いてみることも・いろいろな気持ちの人たちが貴族農民関係なしに話し合ってることを理解し合い最善策を考え続けることが大事だと思う。

第18回平和の主張コンクール

佳作

核兵器の持つ悪影響

北海道釧路江南高等学校 2年 ^{もとみや}本宮 ^{ともか}朋佳

私は、世界が平和になるためには核兵器を廃絶すべきだと考える。理由は二つある。まず一つ目は、核兵器を落とせば、当たり前のことだが、大きな被害を受ける地域がでる。

そして二つ目は、核兵器を持っている国は周囲の国々との良好な友好関係を持てなくなる。この二つの悪影響は核兵器から切っても切れないだろう。

次に核兵器と関係のある二つの悪影響について、より現実味を高め、他人事ではないことを認識してもらうために、現在の世界に置き換えて考える。悪影響の一つ目は、日本が最も当てはまるだろう。日本は二度、アメリカに原子爆弾を落とされている。一度目は、一九四五年、八月六日に広島県の広島市に、二度目は、同年八月九日に長崎県の長崎市に落とされた。原子爆弾を落とした理由をアメリカは「日本との戦争を早く終わらせるためだった。」と言っているが、終わらせるために原子爆弾を落とすのは間違いだろう。それにより、両市に住んでいる未来のある若者や、「日本国」を築きあげた大人たちが亡くなった。その後も被爆した人々が放射線が原因とみられる癌で亡くなった。原子爆弾が落とされたことで亡くなった人数は、広島市で十六万六千人、長崎市で八万人、全体では二十四万六千人に上る。この数字からも核兵器は大きな被害を与えることがわかるだろう。

二つ目は、現に核兵器を所有している北朝鮮を当てはめて考える。今でこそ、日朝や米朝首脳会談を開き友好関係を築こうとする傾向がみられるが、以前の北朝鮮の行動は友好関係より自国の強さをみせつけていただろう。

それにより、いくら北朝鮮側から近づこうとしても、周囲の国々は核兵器の発射を懸念して近づけず、結果として友好関係を築けない状態が続いていたのだ。

日本がアメリカから原子爆弾を落とされたのは、七十四年も前の一九四五年のことだった。当事者の日本とアメリカは、決して忘れたことはないだろう。だが、七十四年も前のことだからアメリカを除く諸外国は忘れていてもおかしいことではないと思う。そのため北朝鮮の様に核兵器を所有し、第二の日本の様な核兵器の被害国を生む可能性を有していると言えるだろう。

このような事態を今後起こさないために、唯一の被爆国である日本がしなければならないことがある。それは原子爆弾を落とすことで起こる被害を経験者から次世代又は全世界に発信することだと私は思う。一言で言うと、戦争で原子爆弾が用いられ、大きな被害を引き起こしたことを風化させない必要があるということだ。なぜその必要があるのかと聞く人もいるだろう。その人に私はもう二度と悲惨な状態になってしまう国を出さないため

だと答えると思う。なぜなら、現在の日本は先進国と言われるが、復興させ経済や技術を発展、進化させるのにかなりの時間、労力を要したからだ。

私は実際にその時代を生きていたわけではないため絶対にそうだったとは言えない。だが今現在ある携帯電話は長い年月をかけ進化したことから先ほどのことが言えると思う。

人は時間経過とともに過去にあった出来事を忘れていく傾向にある。そのため、忘れる前に後世に語り継がなければ、人々の記憶から消し去られてしまうだろう。その対策として経験者が原子爆弾を落とされた時の状況を来講者に語る講演会を開いたり、本にして出版するなどが挙げられる。

つまり、日本がすべきことは様々な方法で次世代に語り継ぎ、世界に発信することだと私は思う。

これらのことから、私は所有しているだけで他国との友好関係を築きにくくなり、更に使用すると大規模な被害を出す核兵器を未来の平和のために、廃絶しなければならないと考える。

第18回平和の主張コンクール

佳作

本当の「平和」とは何か

北海道釧路北陽高等学校 2年 ^{おかべ}岡部 ^{ことね}琴音

一見答えられそうで答えられない、『「平和」とはどういうこと？』平和でない状態、というのは誰にでもわかります。しかし平和とはどんなことか、戦争が起きないことなのか。昔のことなのか、今のことなのか。答えが延々と巡り、なかなか言葉にすることができないと思います。この世界の多くの人が「平和な世界をつくりたい。」と本気で思っていると思います。でも、世界平和と一言で表現しても、その言葉の定義はいくつも存在しています。だから自分の「平和」を定義しなければ、ただの綺麗事を並べただけになってしまいます。

私の定義する「平和」は、差別のない、誰もが自分の意思を持ち未来を選択できる世界、だと考えます。そこへのステップとしても戦争があってははいけません。誰もが安全な生活の保障をされている世界であってほしいのです。しかし、この世界は戦争で溢れかえっています。今、この瞬間でさえも戦争、爆撃に脅えている人がたくさんいるのです。逆に、戦争がなかった時代なんてあったのでしょうか。これだけたくさんの人が、平和について豪語しているのに、なぜ戦争はなくなるのでしょうか。

私は十六歳で戦争を経験したことがありません。所詮、教科書、本で学んだ言葉だけの景色です。想像することもできません。その痛みを実感することもできません。なのに、平和について綺麗事だけ並べて、いいだけ語って、結局何もしないでいつも通り呑気に遊んでいる。そんな偽善者にはなりたくないから、私は、少しでも戦争とはなんなのか、色々な自分の体験に置き換えて考えてみることにしました。

そこで考えた答えは、自我の肯定だと思います。誰だって自分の考えを持っていると思います。自分の考えなのだからそれは自分の中で一番優先されます。その自分の考えを持っている人が数億人いるのです。そこで何が起きるのか、自分が正義ということをゆずらない人たちが集まるとどうなるのか。そう、正義と正義が戦いを始めるのです。身近なことでもよくあると思います。AさんとBさんが会話をしていてAさんがaの意見を出したあとにBさんがbの意見を出したとして、Bさんの意見を聞いたAさんが「Bさんの意見良いな。」と思っても、そこですぐ自分のaという意見を変えるのはどことなく敗北感があり、なかなか素直にできないと思います。そうして結局「自分の方が正しい」と自分の理論を押しつけ、押しつけられ、戦いになるのです。私たちの中からその「正しさ」がなくなる限り、戦いはなくならないと思います。人々が意見を持ちつつも、他人の意見を聞き、自分だけが正しいと思わず、意見を変えることを恥ずかしいと思わない心づくりを

していくことでまずは身近な戦いは少しでも減るんじゃないかと思います。争うよりも協力した方がメリットが大きいという社会の形づくりをそのためにもしていくべきだと思います。

私たちは平和を目の前にしたとき、それが平和だとわかるのでしょうか。当たり前のことの大切さとは、なかなか実感できないものです。それが『『平和』とはどういうこと？』の答えなのではないかと思います。

戦争、被爆、身近な争い、いじめで不本意な死をしなければなくなった人、ご冥福をお祈り致します。どうかこれから、人々が少しでも争いをやめて平等に生きられるようにと願うばかりです。亡くなった方々の悲しくつらい体験が私たち、未来の子どもたちに伝わり、同じ過ちを起こさせないようになってくればとおもいます。

これが私の「平和」についてです。

第18回平和の主張コンクール

佳作

戦争のない世界

北海道釧路北陽高等学校 2年 高山 春花 たかやま はるか

「逃げろ！」

私は平和の主張コンクールに参加するため平和についての論文を書くことになりました。平和と聞き思い浮かぶのはやはり戦争のない世界ではないでしょうか。いざ戦争についての論文を書こうとしましたが、思えば私は戦争について何も知りません。戦争について何も知らない私が戦争について論文なんて書けるのでしょうか。そこで私は父に戦争についての話を教えてもらうことにしました。

父はひいおじいちゃんから聞いた話を教えてくれました。私のひいおじいちゃんは戦争を経験しています。日本が戦争に勝っていた時戦争をしていた相手の国が食料を用意してくれていたそうです。いつも通り食料を取りに行くといきなり襲いかかってきたらしいのです。「逃げろ！」ひいおじいちゃんは仲間と一緒に馬小屋へ走り、銃撃戦の中匍匐前進で逃げました。一緒にいた仲間は銃で撃たれて亡くなってしまったそうです。ひいおじいちゃんはその時の光景が頭から離れないと父に話したそうです。

戦争に対して、いけないことだ、という事はもちろん分かっていました。ですがどこか昔ばなしのように思ってしまった自分がいました。今回改めて話を聞き昔ばなしでもなんでもなく、この地でおきた事実なのだと気付きました。もし日本が戦争に勝っていてもきっと戦争に関わった全ての人の心の傷が癒えることは決してなかっただろうと私は思います。

今、日本では戦争は行われていませんが世界では人と人とが命を奪い合っている現状があります。兵器が発達して相手の顔を見ずとも尊い命を奪ってしまうことができます。ですが戦争には必ず相手がいます。目の前には大切な命があります。戦争について何も知らない人が増える中戦争や核兵器の恐ろしさを忘れかけてしまっています。戦争のない世界にするために私達ができることは、まず自分が関心を持ち目を背けたくなるような悲惨な事実を知り、自分の周りの人達へと伝えていく他ないのではないのでしょうか。

第18回平和の主張コンクール

佳作

平和の祭典オリンピック

北海道釧路江南高等学校 2年 足立 篤駿^{あだち あつし}

私はオリンピックこそが平和の象徴であると考えます。なぜなら、オリンピックは世界の平和に大きく貢献しているからである。

初めに、オリンピックの旗である五輪旗の意味を知っているだろうか。この五つの輪は、アジア、ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカ、オセアニアを表している。それらが繋がって一つになっていることを示している。つまり、オリンピックのシンボルマークには世界が一つに協力することを願うという意味がある。これは、「戦争や内戦で世界が乱れていない」という平和の辞書内意味と一致していると私は考える。

二つ目に、オリンピックをする目的から平和への繋がりを考えていこうと思う。オリンピックの目的は、いかなる差別をも伴うことなく、友情、連帯、フェアプレーの精神をもって相互に理解しあうオリンピック精神に基づいて行われるスポーツを通して青少年の教育をすることにより、「平和」でよりよい世界をつくることに貢献することにあるという。私はこのオリンピックの目的を読んでリオデジャネイロでのオリンピック精神が生んだ名場面を思い出した。陸上女子五〇〇〇メートルで二人の選手が接触・転倒した。片方の選手は立ち上がったが、もう片方の選手は倒れたままであった。このときに起きている選手が助け、支え合いながら、レースに励むという話である。私はオリンピック精神を育てるということこそが世界の平和に貢献しているのだと感じた。

三つ目にオリンピックの意義から考えていこうと思う。最近では経済効果、勝利主義が主な意義となっているが、オリンピックは元々、争いのない世界を一時的に作る事を目的として開催されたものである。オリンピックは紀元前八世紀、イフィスト王によって争いを中止させる事を意識として作られ、それから世界の平等と公平を願う大会になっていった。オリンピックがイフィスト王の願い通りに争いが中止になった例がある。二八〇〇年前の古代オリンピックでは、競技者や観客が安全に各地から開催地のオリンピアまで辿り着き、競技後も、無事に帰路に就くことができるようにと、その期間は戦争を休止していたというものである。そのことから、一九九二年に国際オリンピック委員会はアスリートの価値を守り、世界中の戦争をより平和的かつ民主的な解決に向かうという「オリンピック休戦」を提唱した。

以上の三つの点からオリンピックは世界の平和に大きく貢献していると私は考える。改めて、オリンピックを経済、勝利のためだけの大会ではなく、世界の平和のために開かれた大会である事をオリンピックを見ている人に思い出してほしいと感じた。

第18回平和の主張コンクール

佳作

平和のために

北海道釧路明輝高等学校 2年 ^{やまき}八巻 ^{ゆずは}柚葉

“平和”という言葉は普段の日常生活上の会話の中で使うことが多々あります。今年の五月から令和に変わることが決まった、元号についての話し合いが行われたときにも使われたことでしょう。このように、いつも何気なく使われていますが、その言葉の意味は何ですか。と聞かれてしまえば、おぼろげでなんとなくの回答しか出来ないだろうと考えました。そのため、私は改めて国語辞典で平和の意味を調べてみることにしました。一へいわ〔平和〕①戦争などがなく、おだやかにおさまっていること。②安らかなこと。一この意味を踏まえれば、私達の衣食住があり、学校に通うことの出来る“当たり前”になりつつある日常こそ、“当たり前ではない”、“平和”であることがわかります。

では、この平和を継続しながら、現在でも戦火が上がっている国々が平和に近づくために、私達はこれからどうすれば良いのか考えました。ですが、学生である私達は国同士の問題に直接介入するなどということは出来ません。なのでまずは、過去に起きた戦争による被害、どのくらいの犠牲が出てしまったのかを詳しく知るべきだと思いました。

少なからず戦争によって起きた惨劇を知ることには恐怖を感じる人はいると思います。私もその内の一人で思い返すと、それらを知ることが避けていたのかもしれませんが。小学生のときに図書室で戦争に関する本を読んだことがありました。その本に載っていた挿し絵が異様に恐ろしく現実にあったこととは思いたくなかったことを覚えています。私はその本を本棚に戻し、最後まで読み終えることが出来ずに小学校を卒業してしまいました。その後の中学、高校と進学するにつれて、長崎にある原爆記念館などに行ったりすることで当時のことを知ることも必要ではないか。と考えたこともありました。その場に行ったことのある友人に話を聞いたら、小学生時の本のことが頭に浮かび、知るところに恐怖を抱くことがありました。

しかし、私達の世代では戦争を経験した人はいませんし、数十年後、私達がこの世を担っていく時には戦争の苦しさを知り、それを伝えてくれる高齢者はほとんどいなくなってしまうでしょう。戦争での悲劇をあまり知らないために国に利益があると思い、戦争を起こそうとする人が出て来てしまう可能性も否めません。だからこそ、勇気を出して今しか出来ない、戦争を知る高齢者の方の話を聞くことや本などに目を通し、戦争による被害について深く知ることで、平和の継続と拡大を目指すことが出来ると考えました。

